

2026 年 7 月 17 日 セミナー

人と多様なモビリティが共生する安全で心ときめくゆっくりを軸としたまちづくり
(第 2 回運輸総研ゆっくりを軸としたまちづくりセミナー/第 6 回 TTPU セミナー)

鶴田国土交通省総合政策局長 来賓挨拶

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました、国土交通省総合政策局長の鶴田です。

本日、このセミナーが盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。また、本日のセミナーを主催されました運輸総合研究所をはじめ、有識者の皆様、関係者の皆様のご尽力に心より敬意を表します。

さて、本日のセミナーは、『人と多様なモビリティが共生する安全で心ときめくゆっくりを軸としたまちづくり』の刊行という節目に開催されます。皆様の中で、お読みになった方はどのぐらいいらっしゃいますでしょうか。もしよろしければ手を挙げていただけると……。かなりいらっしゃいますが、まだの方もいらっしゃるようです。私は、今日この場を与えていただいたのをきっかけに読みました。お世辞抜きに おすすめで、今日のお話を聞いてからお読みになるとより理解も深まると思います。ぜひ読んでいただければなと思います。

この本は、先ほど宿利会長からもお話がありましたが、運輸総合研究所における 3 年間の共同研究調査の成果をまとめたものです。

実は私、1 年くらい前に、本日これからお話をいただく石田先生や三重野先生から概要をお聞きしていたのですが、そのときは私の理解力不足で、正直あまりピンと来ていませんでした。多分に情緒的な話なのかなと聞こえまして、「車のスピードを下げると、魔法の杖みたいに世界が良くなる」という、そのメカニズムがよく理解できなかったというのが本音です。

しかし今回、この本を読みまして、いやもうとんでもないと。非常に戦略的なお話で、車の速度を下げるというのが大きな鍵になってはいますけども、それは一部に過

ぎないということも理解いたしました。本当に読んでよかったなと思いますし、楽しく読みました。

ここで内容に詳しく触れるのは避け、また政策的な意義や流れについては、先ほど宿利会長のお話の前半と最後でまとめられていましたので、この場をお借りして、この本を読んで私が感じたことを2点ご紹介させていただければと思います。

1つ目は、今から10年ほど前、私が役所の課長時代を終えた頃のことを思い出しました。

20代の頃はいつも「世のため人のため」と言っていましたが、だんだん交通政策の仕事ばかりしているうちに、「交通を良くしよう」という視点が固定化してきたな、と10年ほど前に感じたことがあります。

ここで申し上げたいのは、交通「を」良くすることだけではなく、交通「で」良くする、この「で」が大事だということです。これまで30何年交通政策に携わってきて、交通に詳しいからこそ、交通の潜在力を解放することができるんじゃないかと考えたわけです。

今日、色々な専門分野の方がいらっしゃいますが、私以外の皆様それぞれのお立場にとりましても、ご自身の今なさっているお仕事、担当されている分野が、いわば「世界の何を変えられるのか」ということに、一層目を向ける余地があるんじゃないかなと思って話をしました。つまり、メタな視点から、自分の関係する分野を見るということを意識したらどうかということです。

今回のテーマである「ゆっくりを軸とした街づくり」で、私たちは世界の何を変えられるんだろうかと考えますと、少なくとも地域経済の活性化や、ウェルビーイングの向上というのがあると思いますが、皆様方はもっと良い答えを見出されると思います。すべての関係者、これは行政、つまり国も地方公共団体も、学术界も、そして事業者もということだと思いますが、それぞれのご自身の強みをメタ認知して、共通の目標を追求したいなと思います。

これに関連して似たような話として、先週報道でご覧になった方もいらっしゃる

かもしれませんが、交通空白が地域と個人に与える影響について、EY ストラテジー・アンド・コンサルティングさんが国土交通大臣に報告をされました。それによると、その影響は年間約 10 兆円の経済損失に相当するとのこと。例えば、家族送迎によって所得の機会損失がある、あるいは交通不便によって消費の機会損失がある、といったようなことで、これも交通が社会の中でどういうふうに力を発揮できるかという一つの事例なんじゃないかなと思います。

そういった理念的な話に加えまして、感想の 2 点目は、非常にこの本の内容が感覚的にも腑に落ちたということです。

思い出すのがスティーブ・ジョブズの言葉で、「人々は、目に見せられるまで自分が何を欲しいのか分からない」とあります。これは「百聞は一見にしかず」ということよりは、むしろ「凡人の想像力の限界」みたいなことかなと思います。

その点、この本で紹介されていますフランスやオーストラリアをはじめとする実例というのは、非常に力があるかなと思います。もちろん、本にも書かれているように、「日本と外国ではコンテクスト（背景）が違う」という反論も予想されるわけです。けれども、先ほどの例えで申しますと、スティーブ・ジョブズ以前の時代にスマホというものをゼロから想像する苦勞に比べれば、実例がすでにこの世に存在しているということの意味は非常に大きいと思います。

付け加えますと、私は 20 年前から 3 年間、パリで勤務し、住んでいました。当時、人々が見知らぬ人にもどんどん話しかけるような様子を思い出すと、この本で紹介されている事例は、私にとっては想像しやすい世界かなと思います。

ただ同時に、その頃のパリには「出会いゾーン（ゾーン・ド・ランコントロール）」はありませんでしたし、当時の日本には「ゾーン 30」すらありませんでした。つまり、この 10 年余りで世界は変わったということです。

ということは、これからの世界も変えられる。もちろん、私たち自身がどういうふうに行動するか次第です。

本日のセミナーでは、海外や国内各地の知見、それから「ゆっくり」を軸とした新

しいまちづくりの考え方について、多角的に議論されると伺っています。国土交通省として、本日お聞きする講演や議論から得られる知見・示唆を、今後の政策や連携に生かしてまいりたいと思っています。今日ご参加の皆様方にとりましても、新しい気づきや実践につながる有意義な機会になることを期待申し上げます。

結びになりますが、セミナーの成功と皆様方のますますのご活躍、ご発展をお祈り申し上げます、私の挨拶といたします。ご清聴ありがとうございました。

(以上)